科学探偵（かがくたんてい）謎野真実（なぞのしんじつ）シリーズ1
科学探偵 VS. 学校の七不思議

もくじ

登場人物……6
学校の見取り図……8

1 歩く人体模型 10

2 笑うベートーベン 46

3 小さなおじさん 78

4 あかずの部屋 114

5 呪いの13階段 150

6 トイレの血まみれの手 182

7 最後のナゾ 214

花森小新聞……248

この本の楽しみ方

この本のお話は、事件編と解決編に分かれています。登場人物と一緒にナゾ解きをして、事件の真相を解明してください。ヒントはすべて、文章と絵の中にあります。

登場人物

青井美希

「スクープ命！」の花森小学校新聞部部長。取材力とカメラの腕には自信あり。現在は、「学校の七不思議」ネタを追っている。クラスは、6年1組。

杉田ハジメ

6年2組の学級委員長。いつでもどこでもマジメで、あだ名は「マジメスギ」。

宮下健太

成績もスポーツも中ぐらいのミスター平均点。超ビビリなくせに、ミステリーや不思議なことが大好き。クラスは、6年2組。

謎野真実

エリート探偵育成学校・ホームズ学園からの転校生。天才的な頭脳と幅広い科学知識を持つ。「科学で解けないナゾはない」が信条。IQは200。クラスは、6年2組。

大前先生

6年2組の担任。理科クラブの顧問で、誰かれかまわず勧誘する。

浜田先生

6年の学年主任。あだ名は「ハマセン」。声がデカくて見た目もド迫力。

林村校長先生

花を愛する、やさしい先生だが、ちょっと奇妙なわさがある。

花森小学校

とある町の、ごくふつうの小学校……のはずだった。

旧校舎
ずいぶん前に建てられた木造の校舎。図工室や生活科室、新聞部の部室もここにある。

新校舎
20年ほど前に新しく建てられた校舎。ふだんはこちらの校舎が使われている。

理科室
西校舎1階。人体模型が歩いたのが、たびたび目撃される。

元宿直室
東校舎3階。閉じ込められて亡くなった先生がいるらしい。

音楽室
西校舎2階。春の夜にピアノを弾くと、ベートーベンの肖像画が笑うらしい。

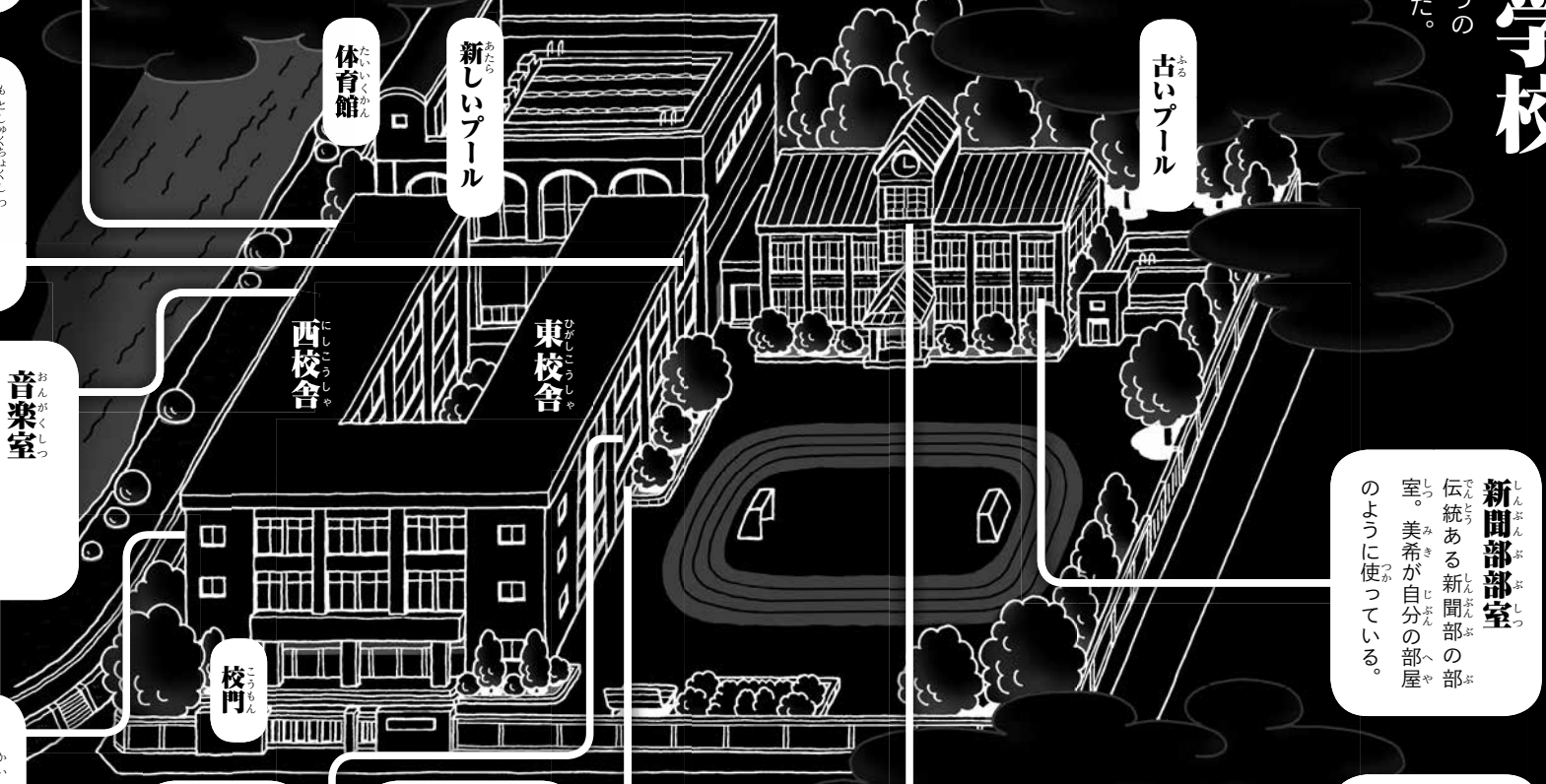
3階の女子トイレ
いちばん奥の個室を使うと、血まみれの手が出るとのうわさがある。

6年2組
真実と健太の教室。担任は大前先生。

校長室
東校舎1階。決まった時間にカーテンが閉められる。

13階段
ふだんは12段だが、たまに13段になるときがある。

新聞部部室
伝統ある新聞部の部室。美希が自分の部屋のように使っている。



学校の七不思議1

歩く人体模型事件編

「すっかり遅くなっちゃったわ」
夜8時前。ひとりの女の子が夜道を走っていた。
花森小学校一のアイドル・6年生の吉川ミホである。
塾の居残り勉強で、いつもより1時間も帰るのが遅くなってしまったのだ。
「早く帰らないと大好きなテレビドラマが始まっちゃう」
ミホは花森小学校の校門にさしかかると、ふと立ち止まった。
学校の中を抜けて裏口から出ると、ミホの家はすぐそこだ。しかし、夜の学校はうす気味悪くて、ふだんはとても通る気になれなかった。
「怖いけど……、ドラマのためよ」
そうつぶやいて、ミホは校門をくぐり、学校の中に入っていった。

西校舎のわきを通り過ぎようとしたとき、ミホは、校舎のようすが何となくおかしいことに気がついた。
1階にある理科室に、ぼんやり明かりがついていた。壁ぎわに人影も見える。
(こんな時間に誰かいるのかしら……?)
目をこらしてよく見てみる。

「えっ?」

人影のようなものは、人体模型だった。内臓がむき出しで、体の半分が筋肉になっている、不気味な人形だ。

ミホは思わず立ち止まった。
（いつもはとなりの理科準備室にある人体模型が、どうして理科室にあるの？）
ミホは、花森小学校に伝わる七不思議のひとつ、「歩く人体模型」の話を思い出し、背筋がゾクッとするのを感じた。
（……誰かが片付けるのを忘れただけよ）
そう自分に言い聞かせながらも、心臓がドクドクと大きな脈を打つ。
ミホは足を速めて理科室の横を通り過ぎようとした。

その瞬間、背中に何かを感じた。
（誰かが、うしろからわたしを見てる……）
ミホは顔をこわばらせながら、おそるおそるうしろを見てみる。
そこには、人体模型が、さっきとは別の場所に立っていた。人体模型はぽっかりあいた目で、ミホをじっと見つめていた。

「きゃあああ!!」

うす暗い校内に、ミホの悲鳴が響き渡った。

「昨日、３組の吉川ミホさんが『歩く人体模型』を見たんだって！」

翌朝。６年２組の教室は、学校一のアイドルが怪異現象を体験した話でもちきりだった。

３か月前にも、４年生の男の子が人体模型が歩くところを目撃していて、そのときも大きな話題になった。

ざわつく教室の中で、小柄な男の子が自分の席で、その話に聞き耳を立てていた。

宮下健太だ。

健太はミステリーや不思議なことが大好きだ。

（やっぱり、歩く人体模型の話は本当だったんだ……）

健太は、人体模型の歩く姿を思い浮かべて、少し怖くなった。

しかし、それ以上にワクワクする気持ちのほうが大きかった。

「おはよう、みんな席に着いて～」

ドアが開き、白衣姿の担任の大前先生が入ってきた。

「今日はみんなに転校生を紹介するぞ～」

「転校生？」

クラスのみんなの目がいっせいにドアのほうを向いた。

ひとりの男の子が入ってきた。

銀縁の眼鏡をかけた美しい顔立ちの男の子。

絵本に出てくる魔法使いのような、変わった黒マン

トをはおっている。

「謎野真実くんだ。なんと、ホームズ学園からの転校生だぞ」

大前先生がそう言うと、クラスのみんなが「ええ～！」と声をあげた。

ホームズ学園は、「探偵」を育成するエリート学校。ＩＱ１８０以上の子どもの中から特別に選ばれた者だけが、入学を許されるという。

（ホームズ学園って、ホントにあったんだ！）

健太も、うわさでは聞いたことがあったが、どこにあるのかも、どうすれば入れるのかもわからない、ナゾにつつまれた学校だった。

（だけど、どうしてウチみたいなふつうの学校に転校してきたのかな？）

健太はそのことが妙に気になってしまった。

ホームズ
ホームズ学園の「ホームズ」は、シャーロック・ホームズに由来している。イギリスの小説家コナン・ドイルが生んだ、世界一有名な探偵だ。

ＩＱ
知能指数。平均的な子どものＩＱは１００。ＩＱが高いほど知能が高いとされる。

１時間目の休み時間。

分厚い数学書を読んでいる謎野真実のまわりには、人だかりができていた。クラスメートはみな、ホームズ学園から来た転校生に興味津々だ。

しかし健太は、そこに加わりたい気持ちを抑えて、ひとりで教室を出て理科準備室に向かった。

（謎野くんのことも知りたいけど、今は「歩く人体模型」のほうが気になる）

理科準備室の前まで来ると、健太はおそるおそる、引き戸になっている扉に手をかけた。

だが、鍵がかかっていて扉は開かない。

ガッカリして教室に戻ろうとしたが、ふと思いついた。

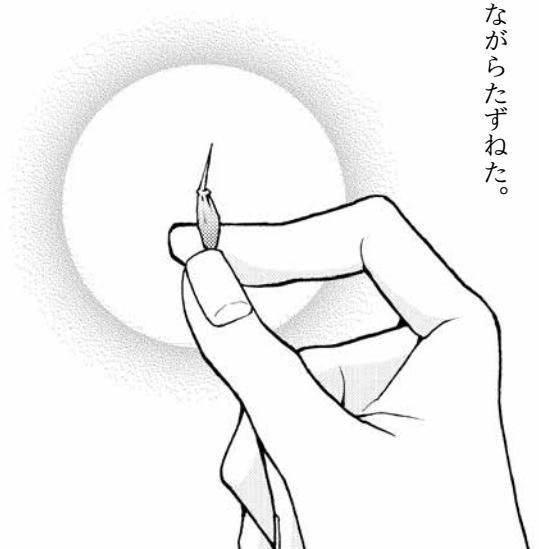
（そうだ！　窓からなら見えるかも）

急いで校舎の外に出て、窓から理科準備室をのぞこうとした。

しかし、窓はすりガラスになっていて、中のようすはよくわからない。

（やっぱり人体模型は見えないや……）

あきらめて教室に戻ると、真実は、まだ人だかりの中で本を読んでいた。
真実は、健太が戻ってきたことに気づくと、本をパタンと閉じ、人だかりを抜けて健太のところにやってきた。クラスのみんなは、驚いたようにこっちを見ている。
「宮下健太くんだね」
「えっ、どうしてぼくの名前を？」
健太は、真実が突然自分に話しかけてきたことにとまどいながらたずねた。
「当然だよ。探偵にとって、情報収集は基本だからね」
真実は、眼鏡越しにチラリと健太を見た。
「ところで、宮下健太くん。人体模型が見られなくて残念だったね」
「えっ、なんで見にいったこと知ってるの？」
「知らないよ。だけど簡単な推理さ。まず、朝、ぼくが入っていく前の教室は、歩く人体模型の話でもちきりだった。廊下まで声が聞こえてくるほどにね。それと……」



真実は、健太のズボンに付いた小さなトゲをつまみ上げて言った。
「これはアザミのトゲだ」
「えっ、いつの間にこんなものが……」
あわててズボンをはたく健太。それにかまわず真実は話を続ける。
「アザミは日当たりのいい場所に生える草だ。おそらく、西校舎の外側に生えていたものだろう。あそこはすぐ前が川で、太陽の光をさえぎる建物がないからね」
真実の言うとおりだった。西校舎の外側は日当たりがよく、雑草がしげっているのだ。
「たしか、理科準備室は、西校舎にあったよね」
うなずく健太。
「キミは人体模型が見たくて理科準備室に行ってみた。でも、鍵がかかっていたので、校舎の外側の窓から部屋の中をのぞこうとした。違うかい？」

アザミ
春から初夏に咲くのはノアザミ。葉や枝にトゲを持ち、主に紫色の花を咲かせる。花のあとは、タンポポと同じように、綿毛のついた種が風を受けて飛ぶ。

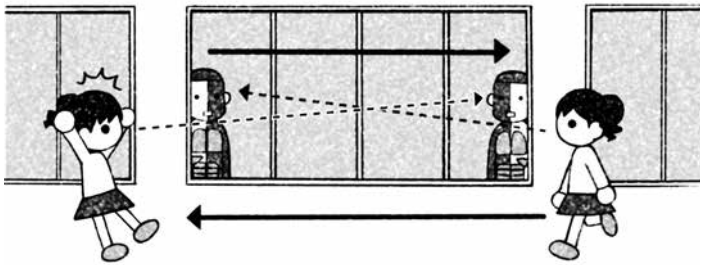
自分の行動をピタリと言い当てられて、健太は心の底から驚いた。
（すごい。あんな小さなトゲだけで、ぼくが何をしていたのかがわかるなんて！）
やはり彼はほかのクラスメートとは全然違う。
「もしかして、謎野くんも『歩く人体模型』に興味があるの？」
「もちろん。すべてのナゾは、ぼくに解かれる運命にあるんだ」
真実は当然のように答えた。
「ナゾを解くには、まず情報を集めることだ。宮下健太くん、次の休み時間、目撃者のところに案内してくれるかな」
「えっ？　う、うん」
健太はとまどいながらも、大きくうなずいた。

２時間目の休み時間。
健太は真実を連れて、３組の吉川ミホのところへ向かった。
「だけど、謎野くん、ナゾを解くっていうけど、ぼくは人体模型がホントに歩いたって思ってるんだけど」
「ホントに歩いた？　キミはずいぶん非科学的なことを言うんだね」
「非科学的って……。そりゃあ、ひとりしか目撃者がいなかったら、ぼくだって見間違いかなって思うけど、３か月前にも見た人がいるんだよ。これって単なる偶然じゃないと思うんだ」
「確かに」と真実はつぶやく。
「見間違いではないかもしれない。だけど、何人目撃していようが、人体模型が勝手に動くわけがない。もし動いたとしたら何か理由があるはずで、それは科学で説明できるはずだ」
「科学で？」
「ああ、この世に科学で解けないナゾはない。目撃者に話を聞けば、きっとナゾを解くヒントが見つかるはずだ」

３組の教室に着くと、健太は、吉川ミホを廊下に呼び出した。
ミホは、健太のうしろにいる真実に気がついて、目を輝かせた。

「あなた、ホームズ学園から来た謎野くんでしょ！　わたし、人体模型が歩いてるのを見たの。すっごく怖かったのよ！」
「では、そのときの状況を教えてくれるかな」
相手が学校一のアイドルでも、真実の冷静さは変わらないようだ。
「……昨日の夜、８時ごろのことだったわ……」
ミホは大きく深呼吸をし、身ぶり手ぶりを交えながら、昨日のことを詳しく話した。

人体模型が歩いた！



話を聞き終わると、真実は小さくうなずいた。
「つまりキミは、理科室の横を通ったときに、理科室前方の壁ぎわに立つ人体模型を見た。少し進んでから振り返ったら、今度は、理科室の後方の壁に、人体模型が立っているのが見えたということだね」
「そ、そうよ」
真実があまりに冷静な口調なので、ミホは少し拍子抜けしてしまった。
「ということは、実際に人体模型が歩いている瞬間を見たわけではないんだね」
「そ、そうだけど、ほんの数秒で反対側の壁に移動したのよ。理科室には誰もいなかったんだから、人体模型が自分で歩いたに決まってるじゃない！」

真実は、興奮するミホにクルリと背を向けて、
「そろそろ次の授業が始まる時間だ。これで失礼するよ」
と、スタスタと自分の教室に向かった。
「あっ、待って謎野くん！　ごめん、ミホちゃん、ありがとう」
健太はあっけにとられるミホにお礼を言うと、真実のあとを追った。

給食の時間。
ゆったりと食事をする真実のまわりを、クラスの女子たちが取り囲んで、質問攻めにしていた。
「ねえ、謎野くん、ホームズ学園ってどんなところ？」
「これまでに解決した事件の話、聞かせてよ」
「ねえ、謎野くん、謎野くんったら」
真実は女の子たちの話に興味なさそうなようすで給食を食べ終えると、ハンカチで口を拭き、スッと席を立った。

健太もあわてて、真実のあとを追った。
「謎野くん、今度はどこに行くの？」
「そろそろ理科準備室の鍵が開いているはずだ」
真実にそう言われて、健太は、午後に理科の実験があることを思い出した。確かに、大前先生がその準備を始めそうなころだ。
「ところで、宮下健太くん。どうして人体模型が目撃されたとき、理科室だけ明かりがついていたと思う？」
「それは……」
（確かに、どうしてついていたんだろう？）
「もしかして、人体模型が自分で明かりをつけたのかな。人体模型だって真っ暗な教室は怖いはずだもん」
その答えに、真実は小さな溜め息をもらす。
「キミみたいに非科学的な人、ホームズ学園では見たことがないよ」
「そんなこと言われても」

「キミに聞いたぼくが間違いだったよ」
「えええ～～っ!!」
とまどう健太をよそに、真実は廊下をスタスタと進んでいった。
理科室の前まで来ると、真実は廊下から中を見回してつぶやいた。
「ここが人体模型が目撃された理科室だね。特に変わったところはないようだけど」
理科室のとなりの理科準備室の前には、大前先生がいた。ちょうど鍵を開けようとしていたところだった。
先生は理科クラブの顧問でもある。
「大前先生、理科準備室を見せてもらえますか？」
「謎野、もしかして理科クラブに入りたいのか？　いいぞ～、理科クラブは」
大前先生は興奮ぎみに理科クラブの楽しさを話しだす。しかし真実はそんな大前先生の話をさえぎって言った。
「そんなことより、調べたいことがあるんです」

「そ、そうなのか……」
大前先生はちょっとガッカリして肩を落とした。
「ちょうど昨日掃除をしたところだから、きれいになってるよ」
「掃除？」
「ああ、3か月に1度、掃除をしてるんだよ」
それを聞き、真実は口元に手をあてて何か考える。
「掃除をしたのは昨日の何時ぐらいですか？」

「ええっと、理科クラブが終わったあとから始めたから、夜の7時ぐらいからだったかな」
「そのとき、人体模型はどこにありましたか？」
「人体模型？　ああ、掃除のじゃまだから、準備室にあった物はぜんぶ、となりの理科室に置いてたよ」
「えっ！」
健太が思わず声を上げた。
「もしかして、人体模型を動かしたのは大前先生？」
健太は、昨日、吉川ミホが見たことを先生に話した。
しかし、それを聞いた大前先生は笑いながら首を横に振った。
「そんなこと先生はしてないよ。人体模型は窓辺に置いただけで、掃除が終わるまで、一度も動かしてないからな」
「動かしてない？」
「ああ。そもそも怖いと思うから、そんな風に見えてしまうんだよ。そうだ、宮下。理科クラブに入って、科学を学ぼうじゃないか！」
「ええっと、それは……」
するとそのとき、真実がドアの前に立った。
「とりあえず、準備室の中を見せてくれますか？」
「あ、ああ。べつにかまわないけど」
真実たちは理科準備室の中を見せてもらうことにした。

理科準備室の中にはいろいろな物が置かれていた。大前先生は自分の部屋のように使っているようだ。
人体模型も壁ぎわに立っている。
「人体模型はこれひとつだけですよね」
真実が大前先生に確認した。
「そうだよ」
健太は、おそるおそる人体模型に近づくと、じっくり観察してみる。

理科室の水道の秘密
理科室の水道の蛇口には、短いホースがついている。これは、薬品が体についたときなどにすぐに洗い流すため。何かが燃えたときの消火にも使える。

内臓がむき出しになっていて不気味だけど、ただの人形だ。
（これがホントに、ひとりで歩いたのかな？）

「なるほどね……」
真実がポツリとつぶやいた。
真実は人さし指で眼鏡をクイッとあげると、健太のほうを見る。
「宮下健太くん、人体模型が動いたナゾが解けたよ」
「えっ？」

解決編

「この世に科学で解けないナゾはない。
答えは、この理科準備室の中にある」

「ど、どういうこと？」
真実はいったい、何に気づいたのだろう？

10分後――。
健太は西校舎の前に立っていた。真実に、吉川ミホと同じように理科室の横を歩くよう言われたからだ。
（歩いてどうなるんだろう？　それでナゾが解けるのかな？）
健太は、真実に言われたとおりに歩きはじめた。
校舎わきを通るとき、理科室を見ると、前方の壁ぎわに人体模型が立っているのが見えた。
（あれって、さっき理科準備室にあった人体模型だよね……？）
理科室を通り過ぎたころ、振り返って、もう一度理科室を見た。
「えっ！」
健太は思わず目を大きく開いた。
なんと、ほんの数秒の間に、人体模型が理科室の後方の壁に移動していたのだ。
「どうして？　なんで??」
健太はびっくりして、その場に立ち止まってしまった。
「もしかして謎野くんが……？」

健太は理科室にいる真実が、自分の姿が見えないようにして、人体模型を動かしたのではないかと思ったのだ。
「絶対そうだ！　それがナゾの正体なんだ！」
健太は大きな声でそう叫んだ。

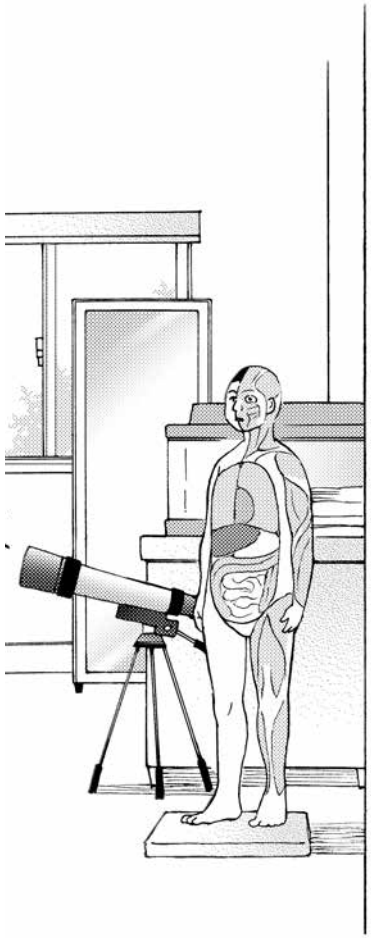
「へえ、どんなナゾの正体がわかったんだい？」

「へっ？」
振り返ると、そこには真実が立っていた。

「えっ!?　どうしてここに？」

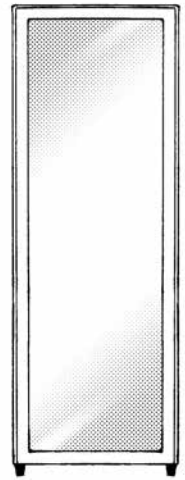
人体模型が動いてまだ10秒も経っていない。

その間に理科室からここまで来るなんて不可能だ。
「ウソ、人体模型を動かしたのは謎野くんじゃないの!?」
「違うよ」
真実は健太をじっと見つめた。
「あの人体模型は、最初から動いてなんかなかった。動いていたのは、それを目撃した人たちなんだ」

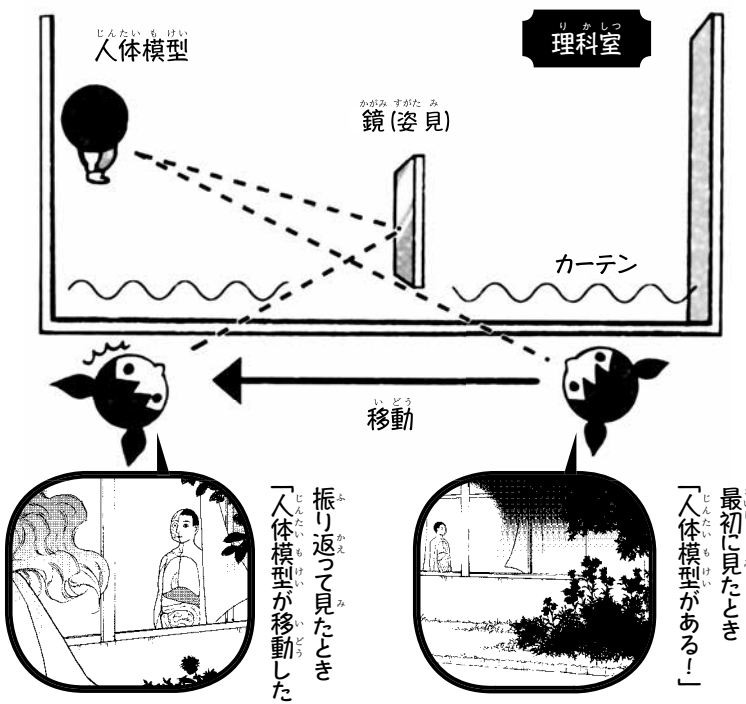


「ええ？　どういうこと？」
「人体模型は確かに昨日の夜、理科室の窓辺に置かれていた。だけど置かれていたのは人体模型だけじゃないんだ。ほら、先生が言ってただろう？　掃除のじゃまだから、準備室にあった物はぜんぶ、となりの理科室に置いたって」
「あっ！」
そういえば、そんなことを言っていた。

「つまり、掃除のあいだ、理科室には準備室にあったいろんな物が置かれてたんだ。たとえば、『姿見』とかね」
「姿見って、あの大きな鏡??」
「ああ。そして人体模型が歩いたように見えたのは、その姿見のせいだったんだ」
「目撃者の吉川さんは校舎のわきを歩いていただろう？　つまり彼女は、最初は本物の人体模型を、歩いて振り返ったときは鏡に映った人体模型、すなわち『鏡像』を見たんだ」



「なるほど〜！」
健太は大きくうなずく。しかし、すぐにあることを思い出した。
「だけど、もうひとり、人体模型が動いたところを見てるよ。ほらっ、前にも男の子が」
健太がそう言うと、真実は小さな溜め息をもらした。
「キミは推理力ゼロのようだね。それがいつのことだったか覚えてないのかい？」
「ええっと、それはたしか……、３か月前……、ああっ！」
健太は真実の顔を見た。



「大前先生は、３か月に１度、理科準備室を掃除してるって言ってた！」
「正解。つまり、その男の子が見たのは、前回、大前先生が理科準備室の掃除をしたときだったんだ」
健太は、ようやくナゾが解けて思わず笑顔になった。
「すごいよ、謎野くん！　さすが元ホームズ学園の生徒だね！」
そう言いながら、健太はふと、真実にたずねた。
「そういえば、謎野くんは、どうしてぼくに声をかけてくれたの？　もしかして、ぼくに推理力があると見込んでくれたとか？」
「べつに、キミを見込んだわけじゃない。ただ――」
真実は、健太の目をまっすぐに見て、言葉を続けた。
「キミは、あの騒がしい教室で、たったひとりだけ、転校生のぼくのことよりも人体模型のナゾのほうに興味を持っていたからね」
そう言われて、健太はなんだかうれしくなった。そして、気になっていたことを、思い切って真実に聞いてみた。

「ねぇ、謎野くんは、どうしてこの学校に転校してきたの？」
「それは……」
真実は急に真剣な顔つきになった。しかしすぐに首を横に振った。
「キミには関係ないことだ。じゃ、ぼくはこれで」
立ち去ろうとする真実に、健太は思わず声をかけた。

「謎野くん！　花森小学校の七不思議は、まだあと六つ残っているよ！」

真実は立ち止まって、ゆっくり振り向いた。
「ふうん、七不思議ね……。その情報は、まだぼくには入ってなかったな」
真実の目が、眼鏡越しにキラリと輝いた。

SCIENCE TRICK DATA FILE

科学トリック データファイル

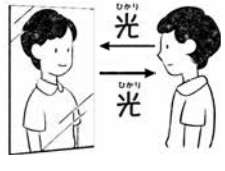
Q. どうして鏡って、左右逆に映るんだろう?

鏡に映る世界

人が物を見ることができるのは、目に入ってきた光を脳が認識するからです（図1）。だから、光のまったくない暗闇では、人は物を見ることができません。

鏡は、ほぼすべての光をはね返す性質があります。これを「反射」といいます。鏡に自分の姿を映すと、鏡に当たった光が反射して、自分の目に入ります（図2）。

（図1）物を見るときは光を見ている。



（図2）鏡を見るときは鏡にはね返った光を見ている。

そのため、自分の姿を自分の目で見ることができるのです。

鏡に映った像が左右反対になるのは、ハンコと同じだと考えることができます。ハンコの文字は、左右が逆になっていますが、紙にハンコを押すと、左右が反転して正しい文字になります。これと同じで、鏡に映ったものは、物の姿がそのままペタッと鏡の表面に張り付いたようなものなので、左右が反転して見えるのです（図3）。

（図3）左右が反転するのはハンコと同じ。

A. ハンコの文字が逆になるのと、同じことだよ